

続・佐々木月樵先生

——近代の教学を荷負した情熱の人——

山田亮賢

一 佛教学の解放

「大谷大学樹立の精神」の中に、一貫して感ぜられるものは、佐々木先生が、今や佛教学の解放の時到了たという歡喜の気配が漲っていることである。「学校の開放は、先ず以て佛敎の解放でなければならぬ」と言われたことは、ここに至る先生の学行の歩みが想像を絶する苦闘であつたことをも知らされるのである。

昭和四十一年十月十三日大谷大学開学記念日に、時の学長曾我量深先生は、講堂においての祝いの講演の中に、「佐々木学長の『本学樹立の精神』を教職員も学生もよく味って欲しい」と重ねて述べられたことを記憶している。若き日、浩浩洞において、共に研鑽にいそしんだ学友の心をよく知り、四十年の時の距りを越えて、老熟せる曾我学長が感慨深く論された時、歴史を貫く大学精神が脈々として今生きていることを痛感せしめられた。清沢満之先生膝下の同門の両先生が、四十年の歳月の推移あるに拘らず、何らの批判の言葉もなく、よく味えと言われたところに、学長の座にある両先生の感応の世界が知らされたのである。この開学記念日は、曾我量深先生の学長職における最後の開

学記念日でもあった。そのことを意識して聞いていた私にとっては、特別に感銘深いものがあり、忘れ得ぬ思い出もなったのである。

更にその二年前、昭和三十九年十二月に発行された「大谷大学のあゆみ」は、同じく曾我量深学長の開学記念日の講演録である。曾我学長はこの中で「当時の佐々木月樵学長が「本学樹立の精神」という講演をされました。私は、その時、はじめてこの学校へ就任したわけでありまして、佐々木学長の「本学樹立の精神」の講演を聴聞したことは、忘れることができないのであります」（一九頁と、佐々木学長の「本学樹立の精神」を直接聞かれた因縁が述べられている。その後が続いて、曾我量深学長が佐々木先生に同感して宗門大学に関する所見を述べていられることは、特に注目に価するものがある。そこでは、「大谷大学は宗門大学ではない。超宗門大学であると、佐々木学長は考えられておられた、ということは間違いない。また、大谷大学は宗門が経営する大学であるけれども、いわゆる宗門大学ではない。日本の国の大学制度というものに従って、宗門が経営しておる大学である。だから、佛教の学問をするけれども、宗門から佛教の学問を一般の社会に解放した。そういうことになっておるといことを、佐々木学長がいつておられる。佐々木学長は、おとなしい遠慮深い方でありますから、スパスパとものをいつておられません。けれどもこの大谷大学は宗門大学でないということだけは、はっきりいつておられる。宗門が経営しておるから、宗門大学といつても差支えないかも知らぬが、宗門が経営する方針というものは、ただ宗門大学として経営しておるわけではない。今まで長い間、閉鎖されておつた宗門を開放していこう。宗門自らを開放していく道を開くためには、まず大学を開放しなければならぬ。こういう方針で大谷大学を樹立した。こういうことを、佐々木学長は「本学樹立の精神」の中で述べておられる。これはよく読めばはっきりしておる。長い間、宗門は閉鎖的であった。何もかも閉鎖的である。その閉鎖的な宗門が、大谷大学を経営しておる。それだから、頭の切り換えが十分でない。それで、大谷大学を経営していくことによって、宗門自身が頭の切り換えをしていかなければならない」と。ここに曾我学長は佐々木先生の

内心に一貫して動いている念願を明快に説かれたのである。性格の違いとも言い得ようが、佐々木先生がスパスバ言
い表せなかったことを、曾我学長は、その心をうけて、鮮かに超宗門大学という表現によって、大学樹立の精神を明
確にして下さったのである。この「大谷大学のあゆみ」の後半には、曾我学長が現在背負っていらられる大谷大学の現
状に触れて、鋭い着眼をもつて、「宗門の内転換」ということを理路整然と説明されている。そして最後に「私は、
宗門の内だの外だのというような距てをもった考えは間違っておると思います。宗門は、国家や社会から、いろいろ
と恩恵を受けておる。恩恵を受けておるから、学校などを経営するときには、これは国家なり社会なりに対する報恩
行である」と言い切っていられることは、宗門立大学を自ら荷負している学長としての深い信念を吐露されたものと
いうことが出来る。現代のわが国の大学が挙って反省しなければならぬ素晴らしい確信といえるであろう。「大谷
大学のあゆみ」において、このような大学のありかたを説かれた曾我学長は、先に述べた二年後の開学記念日には、
改めて佐々木学長の「本学樹立の精神」をよく味えと繰り返されたのみであった。既に二年前の「大谷大学のあゆみ」
において根本的なことは言い尽されていたことにもよるであろうが、あくまで佐々木先生の精神に同感していられた
ためでもある。私は先輩からも何度も佐々木精神という言葉を聞かされた。また大学の理念というものを折り折り
に聞かされ、教えられもして来た。しかし、佐々木学長から曾我学長に至る四十年間の時の流れは、実に波瀾に満ち
た大学の変遷であったと思う。それにも拘らず、「大谷大学樹立の精神」を最も根元的な面で新たに明らかにして下
さったものは、曾我学長の「大谷大学のあゆみ」のみであると言っても過言ではないと思う。従って私にとっては、
佐々木先生の「大谷大学樹立の精神」は、今新たに思いを潜めて、曾我学長の「大谷大学のあゆみ」と合せて再認識
すべきことを深く感ぜさせられるのである。

二 古くして新しき大学

「本学は、寛文の創立とは申しながら、その実ようやく五年前即ち大正九年に初めて、最後の受難に打ち勝つことが出来、その時、初めて本学樹立の精神を究明し、爾来その使命を果すべく出立したりし所の最も古く、然もまた最も新しい所の大学である事を忘れてはなりません。私は今日また若き多数の諸子をこの古くして而も最も新しい我が大学に迎えた事を、先輩諸師と共に心から悦ぶ次第である。」

この佐々木先生の悦びの言葉は、どのように理解したらよいであろうか。結果的にのみ見れば、時代に即応した大が、新たな出発をしたという、所謂再出発した新制度の単科大学の編成完了の喜びであろう。しかし、歴史は二百五十九年も古いものであっても、実際には、五年前、即ち大正九年に最後の受難に打ち勝つことが出来たということとは、見逃し得ないことである。最後の受難とは如何なることであろうか。最後の受難と言われる以上、ここに至るまでに幾度か種々の受難があったことを意味していると思う。思うに、殉教者闡彰院東瀛（とうえい）・清沢満之・南条文雄の諸先生が相次いで、「古き修道院の門戸の扉を開く」ことに努力せられたことは、決して坦々たる道を歩まれたことでないことを意味している。佐々木先生はこれら先師の苦闘を背景として、殊に宗門内の様々なる障礙に遭って逃避することなく、忍苦の歩みを一貫して続けられ、最後の障礙を突破されたことと思う。障礙が受難という言葉によって表現されていることから推しても、容易ならざる古き因襲の壁が厚かったことが察せられる。最後の受難に打ち勝つことが出来た翌年即ち大正十年八月に佐々木先生は欧米諸国に視察のため出発することの機縁を得られた。この視察旅行が佐々木先生の視野を拡大せしめ、「大谷大学樹立の精神」を豊かなものたらしめたことは否めない。また大谷大学が一大飛躍するに相応しい機を得しめたものとも言い得るであろう。

笠脱いて 見よや 天下の青葉若葉

この俳句は、句佛上人の名句であるが、雄渾な御染筆の半切軸が、佐々木家に蔵されている。佐々木先生が渡欧記念に十葉の記念写真はがきを知友に頒たれたのであるが、そのいづれもが、佐々木先生の関心と好みとをよく表わした写真である。その中の一葉が、この句佛上人の俳句である。佐々木先生がどのような因縁でこの御染筆を得られたかは、私には不明であるが、この名句は、佐々木先生の当時の心境に最も適切な意味を持ったものと察せられるのである。渡欧記念にこの名句が、佐々木先生を感激せしめていたことは申すまでもないことである。古い因襲的閉鎖的な佛教学は、先生の学行に暗く重い笠となって覆いかぶさっていたのであろう。この笠は江戸時代から明治、大正へと永く覆いかぶさって容易に取り除くことが困難であったに違いない。教学の上から言えば、闡彰院・清沢満之・南条文雄の諸先生がその笠を脱ぎ捨てたために、身を以て障碍を打破し、受難に打ち勝たんとされたのである。こうした新たな伝統精神が徐々に切り開かれ、遂に佐々木先生は所謂「天下の青葉若葉」を現実に見出し、体現した人と言えるであろう。歴史は古く、しかも新たな広い視野が開けて、「初めて本学樹立の精神を究明し、爾来その使命を果すべく出立したりし所の最も古く、然かもまた最も新しい所の大学であることを忘れてはなりません」という「本学樹立の精神」の中の表現となったことが察知出来るのである。

佐々木先生は、若き本大学は何であるか。実に自信と誇りとを以て「本学は、佛教学、哲学及び人文に須要なる学術を教授し、並びにその蘊奥を攻究する」所の学府である。即ち諸学中、先ず公然と佛教を諸学の首位にかかげる事を唯一の誇りとする所の大学であります。」と言い切って「綱領第一条」に新たな大学の根本的立場を明示された。この立場に立って、予科、学部、学科編成が成り立ったのである。ここに編成された具体的な新構想は、衆智を集めての熟議の結果であることは言うまでもないことであるが、予科に英、独、佛の基本語学を履修せしめ、それ以外に

随意に梵、巴、西語を教えるということが、先ず新たな構想といえる。しかし特に佐々木先生の特別な着想と言い得るものは、予科にドイツ語専攻のクラスを作ったことである。これは当時、わが国の他の私立大学に殆んど見当らないことであった。その意図はドイツ語によって、やがて哲学を学ぶ基礎を作ることにあったのである。佛教学を学として究明する道をここに見出さんとする発想であったことは否めない。更に予科に佛典基礎学を課したことである。佛典基礎学という用語は、この時はじめて用いられたと思う。わが国において、佛教学を学ぶ伝統的な入門書は永く「八宗綱要」であった。それはそれなりの意義はあるが、その伝統の中から新たに佛典基礎学という斬新な名を以て、佛教学研究の基礎学とされたことは、佐々木先生のここに至るまでの佛教学研究の課題を実行に移されたものと言えよう。教主釈尊と宗祖親鸞聖人との二大人格に親炙し、そこから特に「経典」に直参するの意図が具体的に示されている。阿含、華嚴、般若、法華、涅槃等の各種経典の特性を知ることが出来る経文を選び、他方、親鸞聖人の根本所依の経典、即ち大無量寿経、観無量寿経、阿弥陀経とを合せ学ばしめるという学科編成は、ともすれば末註教理のみに陥つて、経典の生きた生命を見失い勝ちになることを恐れて、「経典」そのものに直接参入して、若き学徒が佛教に魅力を感じしめるようにという深い配慮が払われたのである。このことは、佐々木先生の求道学行の経験を通して具現したものと見て、基礎学の意味がそのような意図から用いられたと見るべきである。予科三ヶ年における基礎的な地盤によって、自ら学部を佛教科、哲学科、人文科の三科の何れかへ自然に専門的に進むことが出来る仕組みになっている。

学部においては、佛教科、哲学科、人文科の三科が鼎立しつつ、相関連せしめてある。

佐々木先生は「要するに三科とはいえど、三科は研究の方法に重きを置いて分科されているが、殊に佛教学は哲学的に人文的に学部通修の学となっている」と言われていることから、「樹立の精神」が、三科を貫いて佛教学にあることは明らかである。佛教学を首位に置きつつ、その佛教学が哲学及び人文と内面的に交流しつつ、広く且つ深めら

れて行くことが期せられていることが知られる。更にまた「真宗学と人文科の名は、数年前本学にて学科編制の際、初めて使用した所の名称である。その中、殊に当時非難的となりし所の真宗学の名が、予はいつとはなしに今日既に一般の学用語となった事を悦ぶと共に、今後益々学として、その意義を明らかにし、また、益々宗教として、学内外に論なく世間一般の宗教的人格教養の源泉となる事をば、殊に切望して止まぬものである」と言われている。ここに、真宗学、人文科の名が初めて使用されたことが知られる。今では何ら支障を来す用語ではないのであるが、おそらくこの用語なども、最後の受難の一つであったことが想像される。伝統的には久しく宗乗、余乗の名が用いられて来たものを、特に学の名を附して、真宗学の用語を用いたことは、強い抵抗のあったことが察せられる。また人文科の名を以て三科の一科として独立せしめたことにも、内典、外典と區別してきた古き大学の伝統からすれば、異論の生じたことも当然であつたであらう。こうした用語の上からも、そこに新たな息吹が感じとられ、深い配慮の中から、敢然と踏み切られた新たな大学樹立の精神が汲みとられるのである。

新学科編成について、特に異色あるものは、真宗学のみが、佛教学科以外に別出されたことである。「諸子は唯一つ、そこに多くの科目中、宗名を有する所の佛教学の存することに気附くであらう。そはいうまでもなく、真宗学である。真宗は、大乘佛敎の極致である以上は、一方には学として、今後諸学と同じく益々その研究を深め行くべきであると同時に、本学において之を佛敎以外に別出したのは、また宗教として之を学生一般の宗教的人格の陶冶に資せんが為に外ならぬのである」と、ここに真宗学が佛敎以外に別出されている理由の説明がなされている。この説明は一見奇異な感がある。真宗学は本来的には佛敎の外にあるべきものではない。それなのに特に真宗学を佛敎の外に別出したということは、そこに大谷大学の根本の立場があるからである。如何に新たな大学として発足したと言つても、真宗学を根幹とする大学の伝統精神を抜きにすることは出来ない。真宗学が根幹であることは佐々木先生の信念であると共に、更に益々学としての究明と全学学生の宗教的人格の陶冶に資するねらいがあつたからである。

「真宗は、大乘佛教の極致である」という表現は必ずしも十全な表現とは言えない。私の学生時代には、このような表現が他の人々によってもなされていたように記憶する。思うに佐々木先生のこの表現は教理史的な発展の極致というような意味ではなく、内心は如来出世の本懐であることをかかると推測する。換言すれば、真宗が学としての權威を保持し、その究明が続けられると共に、全学にその根本精神が浸透して、他に類例を見ない学風が生ずることを願われたものと見ることが出来る。ここに佐々木先生の甚深い配意と願いがあったことを読みとらねばならないと思う。

三 宗教的人格の陶冶

佐々木先生は、現制度は大約三条の精神に基いて改正されたと言われ、その第一は佛教を学界に解放すること、第二は佛教を教育からして之を国民に普及すること、第三は宗教的人格の陶冶に留意することであると示されている。この三条の精神は、また皆各々関連して、佛教精神の三面の具現であると言ってもよいであろう。佛教学の解放は、固定化した学を、真実の佛教精神を自由に追究して、源泉に立ち還ることを意味する。従つて所謂宗門とか教団人という一部の人々の独占物ではない。直接的には国民、広くは人類全体のものたらしめることである。「学の解放は、やがてまた人の解放を要求し、その必然の結果として、本学は、改正以来僧俗共学をば断行したのであります。されば非僧非俗の真宗は、宗教上のみならず、現制度によって初めて今年より教育的にも、自然その意義を確かめることになったのであります」と、学の解放が人の解放であるという佐々木先生の信念は、佛教精神、特に真宗精神の現実に具体化した実践精神であった。当時の所謂宗門立大学としては一大飛躍であり、再考すれば当然なことであるが、実際には極めて至難なことである。佐々木先生の生涯を賭けての課題であり、それがいよいよ実現の緒に着いたと言える。既に初代学長(当時学監)清沢満之先生が、東京巢鴨の真宗大学新築移転式の際に明らかにされた開校の辞「本

学は他の学校とは異なりまして、宗教学校なること、殊に佛教の中において、浄土真宗の学場であります。即ち、我々が信奉する本願他力の宗義に基づきまして、我々において最大事件なる自己の信念の確立の上に、その信仰を他に伝える、即ち自信教人信の誠を尽すべき人物を養成するのが、本学の特質であります。……」と建学の精神が明確に宣言されたことは有名なことであるが、佐々木先生が、今や学の解放が人の解放へと新たな大学の展開を示されたことは、その源は何としても、清沢先生の信念の上に立脚してのことであることが明らかである。本願他力の宗教に基いての自己の信念の確立、そこから自信教人信の誠を尽すべき人物を養成すること、ここから学の解放と人の解放が花開いて佐々木先生の新たな実践となったことは、真の伝統の生成発展ということが出来よう。人の解放が佐々木先生によって広く門戸開放となっても、また清沢先生の自信教人信の誠を尽すべき人物養成が等閑に附せられたならば、徒らに大学が拡大されただけで、建学の精神は消え失せるであろう。しかし佐々木先生は、学の解放と共に人の解放に重点を置かれたことを銘記しなければならない。

「人間が人間としての社会的資格は、いつ何れにあっても常にその人の人格であらねばならぬ」と言って、資格の取得に対しての誠めとして、人格尊重を強調していられる。門戸開放については、自ら危険性の伴うことを見抜いてのことである。また「本学は一般に哲学及び人文に関する諸学に関する研究は申すまでもなく、今後益々佛教の学問及びそれに基く所の宗教的人格の修養とを以て、予は之を本大学の特性と致し度思う所のものである。」と言って、宗教的人格の修養ということに、人の解放の目標を置いていられることが、明らかである。佛教の学問と、宗教的人格の修養は切り離されるものでない。人法一如と言われるように、佛教そのものが、学として究明されるれば、その人が自ら宗教的人格を形成して行く筈である。佛教学とは本来そのようなものである。学と人格との乖離は佛教精神に背くものである。それ故にまた人が大切である。学は厳しいと言われる。しかし宗教的人格の修養ということは、更に困難なこととも言える。ここに佐々木先生の宗教的人格から流露した具体的人材養成の実際の企画を取り上げる必

要がある。

四 人材の養成

前稿にも述べたように、佐々木先生は大正十年八月、宗教及び教育視察のため、沢柳政太郎、小西重直、長田新等の諸先生と共に、第一時欧州大戦後の欧米諸国を歴訪せられたのである。既に学問的にも人間的にも出来上っていた先生には、欧米諸国における宗教及び教育の実情については、その視察の着眼点が異っていた。それは多くの宗教者の中においても、佐々木先生のような広い視野に立って、見るべきものを見、聞くべきものを聞いて、その生きた材料を直ちに新たな大谷大学に生かして行くというようなことは、到底類例を見ないことである。「佐々木月樵全集」第六卷「思索及雑華」の最後に見られる「欧米雑感」は、実に広い視野に立っての見聞の成果と言える。「欧米の教育学に就て」「聖保羅寺に詣ずるの記」「音響忍」「学校と寄宿舎」「最近独逸の宗教界」「宗教と教育家」「ルイゼ嬢と天目女」「宗教と政党」「海外にてあへる三婦人」等が収録されているが、佛教学者として、その見聞の広さは、この題名を以てしてのみでも知ることが出来る。宗教、教育、音楽等一連の関連あるものを限られたる時間の中、諸国遍歴の忙しい旅行において吸収出来るものを、最大限に撰取して帰られたのである。そこには絶えず大谷大学への新たな構想が、脳裏に往来していたことは当然である。

この中、特に人材養成に関するもの一つとして「学校と寄宿舎」の視察が、佐々木先生の新たな企画として、大学の学寮建設の実現となったのである。「学校と寄宿舎」の中では、英、独、米の三国の国民性の特徴を見られ、人材の養成に関しては、特に英国に関心を向けておられる。先生は英国の有名大学から、女学校、小学校、幼稚園等までを入念に参観せられ、英国の各大学が、寄宿舎を持ち、その寄宿舎が各々長い歴史を持ち、そこに育成された先輩の人物に、学生が誇りを持って生活していることに着眼しておられる。「唯、独逸式に学問研究というだけで人間が

よいならば、それで結構であります。若し教育が人間を造るものであるならば、これは、教育上、最も心すべき点ではなからうかと存じます。私は次表の如き英国の寄宿舎中心の学校制度は、今後我が教育上参考すべきことではなからうかと存じます」と述べて、図表が示されている。その図表を見るに、寄宿舎を中心として円が画かれ、その外円に、教会堂、教室、運動場という風に三種の教育上必要な設備が記されている。要するに人材養成の直接的機関は教室よりも、寄宿舎中心である。この寄宿舎の必要性を佐々木先生は直ちに実行に移された。大谷大学はその当時、大学構内に南北二つの大きな寮が出来ており、百名以上の学生を十分に収容出来た。しかしそれはそれとして、佐々木先生は先ず手始めに、英国の二十名か三十名程度を収容している寄宿舎に倣って、小規模の分散寮を建設することに踏み切られたのである。若しこのような寮が次々に出来れば、それぞれの寮において特色が生じ、生きた人材の豊かな教育が出来ると確信されていた。現在存在する「大谷大学育英学寮」は、その前身は、「三河育英学寮」であった。佐々木先生は三河の国の出身であるから、先ず手近かな郷里の三河の国に働きかけられたのである。寮の実現のためには郷里の人々に賛成を求め、建築の資材等も郷里の物を使用するという方針で寄附を求められた。その企画が賛同を得て、可成り進捗した時、不運にも、先生は急逝されたのである。先生の計画は、三河育英学寮が手始めてであって、更に数多くの相似た小寄宿舎の実現を願っていられた。三河育英学寮は、一時建設が挫折したが、やがて迂余曲折を経て、一応、佐々木先生の念願に応えたのであるが、実際には佐々木先生の計画せられた寮とは程遠いものとして出来上った。今はその後の変遷があつて「大谷大学育英学寮」となったのである。佐々木先生の「生い立ちの周辺」の中で触れた「三河育英学校」は早く廃校となつて、その代りに三河育英財団が生まれ、この財団が「三河育英学寮」の運営に当たつたのである。育英学寮の名は、源を尋ねれば、三河育英学校であり、佐々木先生が少年の日に学んだ地方宗門子弟の教育機関であつた。大谷大学の関係寮としては、三河育英学寮に次いで、現存の「尾張学寮」が生れた。それは佐々木先生の直接に関与せられたものではないと思われるが、結果的には必要性を生じて相似た理

由で建設されたものと思う。更に佐々木先生没後、先生の念願に随喜した東京松谷元三氏の特別の好意によって、植
物園の北隣に「自灯寮」が建てられ、大谷大学の学生を容れ、宗教的雰囲気豊かな異色ある寮として、学生がその
恩恵に浴したのであるが、戦後廃止されたようである。寮に関して種々変遷はあったが、佐々木先生の大きな念願が
何らかの形で実現の緒についたのではあるが、実際に実を結ぶまでには至らなかった。しかし人材養成の具体的方途
を示し、その実現に直接当たったことは忘れてならないことである。あのような学匠が、こうした人材養成の実際の
事業に心を砕かれたことは、「大谷大学樹立の精神」の中に見られる宗教的人格の陶冶を、日々の学生の生活そのも
の中から実行に移そうとせられたものであることが知らされるのである。

五 人格陶冶の三モットー

佐々木先生は人格陶冶の三モットーとして、本務遂行、相互敬愛、人格純真の三綱を示された。記憶をたどれば、
私の予科生時代には教授から時折この三綱に関しての説明を聞いたことがある。今は内容についての記憶は忘却して
しまっているが、佐々木先生がこの三綱を選び掲げられたことには、実に練り上げた実践的法印とも言い得るもので
ある。一応は誰でも知っている単純そうに見えるモットーであるが、三綱は切り離し得ない人格形成の主要な要素を
為している。ここでは、特に若き学徒に思いをかけ、大きな期待を持って掲げられたモットーであるが、その何れを
とつても、人間全体に願われている願いでもある。佐々木先生の最も関心の深かった学行の中からこの三モットーの
生れる根源を私は私なりに求めて見よう。勿論私見に過ぎないことを前提としてのことである。

本務遂行は実践的な面からして、最も困難なことと思われる。そして人間全体に対して要められることであるが、
特に青年学徒にそのことが強く言われねばならないことは、人間形成の途上にある学徒が、学徒の本務から逸脱する
ことなきことが特に願われているからである。学生は学生として「あるべきやう」ということに主眼が置かれている

と思われる。佐々木先生は「人格と教養」（全集第六卷）の中で、明慧上人の偉大さを讃えて、特に「あるべきやう」と教えられたことに関し、『教師は教師のあるべきやう』『学生は学生のあるべきやう』というのである。然し実際となると、これが、なかなかむつかしいのである。』と云っていられる。この「あるべきやう」が困難であつても、それは若き学徒においては、強く願われていることである。本務遂行はこのように味わわれてよいのではなからうか。相互敬愛は、直ちに「大無量寿經」の「当相敬愛」に思い合すことが出来る。しかし、人間相互の敬愛もまた至難なことなのである。われわれにとつては、特に同朋意識において、それが成り立つと言えるのではなからうか。佐々木先生は「実験の宗教」第八講「宗教的同胞」（全集第六卷）の中に社会的同胞とか、宗教的同胞ということを詳細に説明していられる。特に「一文不知の尼入道に対しても、御同朋御同行とかしづき給いし親鸞聖人の同胞主義は、この他力の信仰の上に成立するところの同胞主義であります」と言つてあることなど、この宗教的精神を根底としての相互敬愛が、宗教的人格を形成する最も重要な意味を持つと思われる。特に真理探究の学徒の相互敬愛が如何に重要なことであるかは、この点から首肯されることである。

人格純真は、佐々木先生が、特に研究せられた「華嚴經」（入法界品）の善財童子の求道精神を思い合すことが出来る。限り無く道を求めて、数多くの善知識を歴訪し、ただ一つの問いを貫いた童子の純真な姿勢は、宗教的人格形成の典型である。かの華嚴宗の祖、法蔵が「離染貞潔は道器となることを表わす」と童子の説明をしているが、正しく人格純真そのものの意を明らかにしたものと云える。佐々木先生の脳裏には、必らずや善財童子の求道の姿が、人格純真そのものであり、直接的には青年学徒に、その姿勢を願われたことであらう。

以上、三 motto に関して私見を交えたのであるが、三者が一人格に融合して、真理探究の宗教的人格の形成が出来ることを強調されたと思うのである。

六 無窮の志願

学生にかけられた佐々木先生の期待は、ただ学生にのみ多くを負わそうとされたのではない。学生への期待はまた学生に込めるものがなくてはならない。それは先生自らの学行がそれを物語っている。前稿において、先生の「佛敎研究の成果」において述べたように、先生は「大谷大学樹立の精神」そのものを自ら実践しておられたことを知る。佛敎研究の方法においても、そのことがよく理解出来る。「実験の宗教」や「親鸞聖人伝」に見られる宗教的求道の情熱が貫かれて、しかも最後には「撰大乘論」の四訳対照研究というような緻密な現代佛敎学の一方法を切り開かれたことはわれわれが心に銘記しなければならない。如何に専門的な究明がなされても、その学問が宗教的情熱を欠いているものであったならば、佐々木先生の願いに応えたものではない。その意味で佐々木先生の佛敎学研究の経過とその方法は、現在のわれわれに改めて再考させられる極めて示唆に富んだものであると思う。更に佛敎学の解放について思うことは、佐々木先生の並々ならぬ懇請によって、鈴木大拙先生を大谷大学に迎えることが出来たということである。その間の詳しい事情については知悉し得ないが、あまりに有名なことであり、今日では色々な語り草とまでなっている。また佐々木先生が自ら西田幾多郎先生を大谷大学の講義に招かれたことも、先生自ら佛敎学の学形成に哲学を重視されたことの一証拠である。先生が学長職に在りながら、自ら京都大学に足を歩んで、西田先生の講義を聴かれたことも、先生の内に求めていられるものが際限ないものであったことが知らされる。この学問と教育との一体となった大志願は無窮のものとも言い得るのである。

佐々木先生御在世の頃から、幾十年、大谷大学に在職して下さった大庭米治郎先生の「遺稿集」の中に「大谷大学三十年」という回顧録が載っている。この中に見られる各学科の教授陣は、佐々木先生の学長の当時、「それぞれ色合を異にして、百花燦乱まことに壯観である」とその多くの教授名を挙げ、詳細な実情が述べられている。しかも、

それは佐々木先生の構想と志願に応じて成り立ったものである。このことを大庭先生は讚歎の言葉を以て述べてられる。こうした教授陣を整えられたことも、佐々木先生が学生を愛し、未来に願いをかけて、第一に学生に伝えられたことと言えるのである。

佐々木先生の「大谷大学樹立の精神」に見られる構想はあまりにも大きかった。赤沼智善先生の佐々木先生の追悼文の中には、「故学長の愛と熱情とは、宗門の中核を動かして、そこから更生の一步を踏み出そうというにあった。それははたから見ると殆んど空想にも近い程のものであった。しかし故学長の愛にその空想をも現実化せず措かないという熱情を持っていた。」と述べられており、金子大栄先生が当時の雑誌「佛座」に「佐々木月樵師を憶う」と題して、佐々木先生との深い交流について述べていられる中に、曾我先生の感想が載せられている。「佐々木君は、その学問においても、何か大きな系統が立とうとしていたのでしよう。しかしそれが余りにも大きいため自分でも容易に纏りもつかずに困っていられたに違いない。しかし自分のが纏りがつかぬにしても、とにかく見当がつけられていたから、誰のを見ても、それで満足することが出来ぬあるものがあつたのでしよう。」と言われたそうである。金子先生は佐々木先生の生前に時々そのことに気付いていたが、これから師の志願がそのまま実現する時の来らんことを期待すると言っていられる。

このように佐々木先生の知友が、既にその志願の大なることに瞠目していられたことを知る。

この巨星地に墜ちてといおうか、巨木倒れてといおうか、先生逝いて既に半世紀、世相は目まぐるしく激変し、大事も幾多の曲折をたどり、当時とは、著しく変貌した。佐々木先生の無窮の大志願に今何と応えるべきであらうか。時代が変ったと言うだけでは済まされないものがある。今において「大谷大学樹立の精神」を深く省みる時が新たに到来していると信ずる。

註

「大谷大学樹立の精神」

佐々木先生の自筆草稿は、大谷大学図書館に貴重本として所蔵されている。佐々木先生の令息佐々木真祐氏が、山口 益先生に贈呈されたものであり、山口先生が更に大谷大学図書館に取められたものと聞いている。この自筆草稿は、全文一見判読し難い程、添削、訂正がされており、青インクの原文にまた赤インクが多く訂正に用いられている。

最初は「本学樹立の精神」となっていたのを消して「大谷大学樹立の精神」と改められている。

此の自筆草稿本と同じものが、佐々木月樵全集に用いられ、全集第六巻に載せられている。

「大谷大学要覧」に第一回掲載されたのは大正十四年十月一日である。佐々木先生の生前のことであり、病没せられた半ヶ年前のことである。この「要覧」の中には、自筆草稿本とは一致しない箇所が数ヶ所ある。しかしそれは誤植ではなくして、明らかに文章、語句の訂正である。佐々木先生自身が訂正されたのか、誰か大学当局の代表者が訂正されたのか不明である。この訂正は「大学要覧」としての公的な意味を持っていることを顧慮して、慎重入念にしてある。

「調和の饗宴」の最初に載せられているものは、自筆草稿本、佐々木全集所載本が底本であるが、当時、多田 鼎先生が入念に語句や仮名使いの訂正を私に申し出られ、多田先生のお言葉に従って、約十ヶ所程訂正したものである。

主な参考資料

大谷大学の歩み

佐々木月樵全集

観照第六号

大庭米治郎 遺稿集

佛座 第四号

朝日新聞 昭和四十一年七月二十一日(3)「折り折りの人」谷川徹三

「私が京都にいたのは大正七年から昭和三年までであるが、そのころの京都大学における毎週土曜日午後の西田幾多郎先生の哲学特殊講義は今もって多くの人びとの語り草となっている。この講義には学生ばかりでなく、卒業してすでに何かの職業についている者、他学部、他大学の教授、助教など雑多な人が、それも京都在住者だけでなく、大阪、神戸あたりからも聴講に来ていた。そのころ大谷大学の学長をしていた佐々木月樵氏がよく顔を見せていたのを私は今も覚えている。」